

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370513

研究課題名(和文)日本語危惧表現の史的研究

研究課題名(英文)A Historical Study of Japanese Expressions of Anxiety

研究代表者

近藤 明 (KONDOH, Akira)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：50178406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：(1)古代語における「モゾ」「モコソ」による危惧表現の性質 (2)「モゾ」「モコソ」以外に古代語で危惧表現に与っていた形式がどのようなものであり、どのような体系をなしていたか (3)近世期以降、危惧表現はどのような形式によって担われるようになったか、の三点を主な論点とした。(1)に関しては真正モダリティ・未実現事態危惧・特定の危惧等を「モゾ」「モコソ」に共通する性質として挙げ、(2)(3)に関しては各時代・資料における危惧表現形式の候補をピックアップするとともに、危惧表現の体系・消長を記述するには(1)のような危惧の性質への留意も必要との見通しのもと、各論的考察を進めた。

研究成果の概要(英文)：I have mainly studied three topics:(1)characteristics of anxiety expressions using -mozo and -mokoso in Old Japanese.(2)what expressions were used to show anxiety other than -mozo and -mokoso and how those expressions related to each other.(3)what forms have been utilized to express anxiety since modern period.And I described how the system of anxiety expression was and how it changed over time.

研究分野：日本語学

キーワード：危惧表現 真正モダリティ・疑似モダリティ 未実現事態危惧・既実現事態危惧 特定の危惧・不定的危惧 複合助詞 複合助動詞 疑問推量表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代日本語の複合助詞「モゾ」「モコソ」については、危惧の意を認定することの是非、危惧の意の認められる範囲・条件等、先行研究の中で相応の議論が積み重ねられてきた。しかしそれ以外の危惧表現形式やその歴史については、「～カネナイ」が危惧の意に転じる過程についての山田忠雄や本研究代表者の論、近世の評価的複合形式に関する矢島正浩の論が存在する程度であった(ただし後者は「危惧」の観点に特化されたものではない)。

(2) 上記の状況下、古代語において「モゾ」「モコソ」以外に危惧表現に与る形式にどのようなものがあったかの考察は、本研究代表者が本研究に先立って行っていた可能表現・難易表現の研究の一環として、中古の源氏物語について行ったものが存在する程度であり(近藤明「中古における危惧表現をめぐって」「モゾ」「モコソ」とその周辺」『国語語彙史の研究』32 2013 和泉書院)、そこでは「～ヌベシ」「～ツベシ」等の複合助動詞系の形式、「ヤム・ラム」等の疑問推量系の形式、更に「～テハアシ」等の「仮定条件表現+評価語」等の形式がリストアップされたが、それらの各論的考察に踏み込むには至っていなかった。

(3) 上記以外の時代・資料における危惧表現に与る形式のリストアップは行われていず、従ってそれぞれの形式の担う危惧表現の性質にはどのような共通点・相違点があるのか、それらがどのような体系をなし、歴史的にどのような消長を重ねてきたかについても、本格的な議論は行われていない状態であった。

2. 研究の目的

(1) 古代語において「モゾ」「モコソ」以外に危惧表現に与る形式にどのようなものがあったか、1の(2)で述べた源氏物語以外に、文体の異なる和歌資料や訓点資料、上代語資料等においても、そのような形式の候補をリストアップする。

(2) 上記の形式の各論的研究を進め、「モゾ」「モコソ」とそれ以外の危惧表現形式の表す危惧の性質の共通点・相違点等を明らかにしていくことで、上代・中古といった古代語における危惧表現の全体像を描き出す。

(3) 近世以後においても危惧表現形式のリストアップを行い、上記(1)(2)とあわせ考えることで、危惧表現の史の変遷、各形式の消長を明らかにしていく。

(4) 上記(1)～(3)の考察を進めていく中で、日本語の危惧表現にはどのような類型があり、

その類型にはどのような時代的傾向や歴史の変遷があったのか、可能表現・可能性表現等の隣接性が想定される表現との史的連続性はどのようなものであるか等の点を解明していくことをも視野に入れる。

3. 研究の方法

(1) 「モゾ」「モコソ」以外の危惧表現に与っていた形式をリストアップするために、本研究に先立つ1の(2)の考察においては、中古の源氏物語において、「モゾ」「モコソ」によって危惧されている事態(被危惧事態)を表す語句に着目し、その語句の他の用例を調べて、その事態を危惧的に述べる場合どのような形式が共起するかをチェックする、という手順をとった。

中古和歌資料(本研究では三代集を使用)における危惧表現形式のリストアップについては、同資料内で上記の手順をとることですむが、上代においてはまだ危惧の意の「モゾ」「モコソ」が成立していないとされるため、この方法はそのままでは使用できない。そのため時代・文体的に比較的近い三代集の和歌についてまずの手順をとり、そこでピックアップされた非危惧事態を表す語句の万葉集における用例についての手順をとることで、上代語資料における危惧表現形式の候補をリストアップするという方法をとった。(雑誌論文)。また訓点資料については、資料の通読である程度の見当をつけようとした。これらの方法によって古代語における危惧表現形式の候補としてリストアップされた形式について、更に各論的考察を行うという手順をとった(雑誌論文)。

(2) 「モゾ」「モコソ」が既に消失した近世以降における危惧表現形式のリストアップについては、資料の通読による拾い出しを主にさせるを得なくなるが、古代語で危惧表現形式の候補としてリストアップされた形式やそれらの後身と見られる形式、あるいは現代語の危惧表現形式に該当する形式やその前身と見られる形式に留意する、当該時期における語学書や和歌注釈書で「モゾ」「モコソ」の説明や語釈に用いられている「里言」「俗語」に注目する、といった観点を併せてとることで、主観的偏りを避ける工夫をもした(雑誌論文)。

(3) 上記のような手順をとる中で、「モゾ」「モコソ」による危惧の性質・特性を明かにしておく必要性の強さを改めて感じ、仁田義雄のモダリティ研究の知見を取り入れた「真正モダリティ(形式)・疑似モダリティ(形式)」という観点、山口堯二による疑問表現研究の知見を取り入れた「特定の危惧・非特定の危惧」という観点、更に「未実現事態危惧・既実現事態危惧」という観点等から、「モゾ」「モコソ」に共通する危惧の性質・特性を論じた(雑

誌論文)。また「モゾ」と「モコソ」の相違については、被危惧事態の深刻性・切迫性に着目した(雑誌論文)。

なお上記(1)~(3)の方法・着想の吟味に当て、学会発表とそれに伴う討議が有益であった。

4. 研究成果

(1) 「モゾ」「モコソ」の表す危惧の性質についての考察では、以下のような成果を得た。

「モゾ」「モコソ」は未実現事態に対する危惧を表すという従来の見解を確認するとともに、「真正モダリティ(形式)・疑似モダリティ(形式)」という観点からの検討では、発話時における話し手の心的態度を表す「真正モダリティ(形式)」に属するものであるとの見解を、「特定の危惧・不定的危惧」という観点からの検討では「特定の危惧」を表すとの見解を得、これらが「モゾ」「モコソ」は使用の制約が多い形式とされることにも繋がるとの見通しを得た(雑誌論文)。

「モゾ」「モコソ」による非危惧事態は人為的なものに偏るとする従来の見解を確認するとともに、「モゾ」と「モコソ」の相違点として、危惧される事態の深刻性・切迫性に着眼し、「モコソ」の方がより深刻性・切迫性の強い事態に対して用いられるとの見通しを得た(雑誌論文)。

(2) 古代語における「モゾ」「モコソ」以外の危惧表現に与る形式のリストアップと、その各論的考察では、以下のような成果を得た。

中古和文系散文の源氏物語における「モゾ」「モコソ」以外の危惧表現形式については、既に1の(2)で述べたような見通しを得ていたが、「モゾ」「モコソ」が成立する以前の時代である上代の万葉集や中古において文体の異なる三代集の和歌についても3の(1)で述べたような方法で検討を行い、複合助動詞「~ヌベシ」、疑問推量系の「ヤム」「~ムカモ」や、「仮定バ+惜シ」等、源氏物語と同様の表現形式が挙げられた他、万葉集においては「~マク惜シ」も新たな候補として挙げられた(雑誌論文)。また中古にあっても「モゾ」「モコソ」の用いられない訓点資料については、「オソ(ル)ラクハ~」「~コトヲオソル」等の表現形式が候補として挙げられた(雑誌論文)。

上記でリストアップされた形式のうち、複合助動詞「~ヌベシ」「~ツベシ」については更に各論的検討を行い、これらは危惧専用とは言えないものの、特に「~ヌベシ」の方には危惧の意とある程度の親近性が認められ、危惧表現形式の一環をなすものと見な

し得るとの見通しを得、「~ツベシ」についても特に「~モ」を伴って「~モ~ツベシ」という形をとる場合、危惧の他は極端な例示を伴う「可能(性)」の判断や推量等、限られたパターンの中に多くが収まるとの見通しを得た。

更に危惧表現形式としての「~ヌベシ」「~ツベシ」の性質を検討し、「特定の危惧」を表し「不定的危惧」を表さないこと、「未実現事態危惧」を表し「既実現事態危惧」を表さないことにおいて「モゾ」「モコソ」と共通点を有し、非文末用法を有すること、「疑似モダリティ(形式)」と位置づけられること(過去になることがある、話し手以外の心的態度を危惧を表すことがある等の点から判断)、人為的な事態に対してだけでなく自然現象等に対しても用いられることにおいては、「モゾ」「モコソ」と異なるとの見解を得た(雑誌論文)。

(1)の および上記の見解によれば、「不定的危惧」「既実現事態危惧」は、「モゾ」「モコソ」によっても「~ヌベシ」「~ツベシ」によっても表され得ないことになるが、古代語においてそれらを表していた形式の候補として、「不定的危惧」は疑問詞を伴う疑問推量形式、「既実現事態危惧」は「ヤツラム」のような疑問推量形式と完了の助動詞の組み合わせや、「ヤケム」のような過去推量の助動詞「ケム」を用いた疑問推量形式等が考えられることを述べ、危惧表現形式の一環としての疑問推量形式の位置づけを考える場合、そのような観点も必要になるとの見通しを示した(雑誌論文)が、これらの点については更なる具体的検証・検討の必要が残る。

(3) 「モゾ」「モコソ」の用いられなくなった近世期以後の危惧表現形式の消長については、3の(2)で述べた方法で検討を行い、以下のような成果を得た。

近世前期の上方語資料である近松世話浄瑠璃では、「~カネナイ」がこの頃から危惧の意を担うようになってきている一方、従来の可能・可能性の意味での用例もお見られる。他にも「~ウモシレヌ/シラヌ」「~モシレヌ/シラヌ」、二重否定「~マイモノデモナイ」のような可能・可能性系の複合的形式も挙げられ、これらと危惧表現形式との史的連続性の強さを示唆するもののように思われた。また「~マイカ」「~ヌカ」のような否定疑問(推量)形式、「~ウカ」のような肯定疑問推量形式、「~バワルイ」「~テハナラヌ」のような評価的複合形式も候補として挙げられたが、前者については、古代語で危惧表現に与っていたと見られる疑問推量系形式が肯定疑問形であったのに対し、当代においては否定疑問形式への推移傾向が見てとれる一方、近世後期以降多く見られ現代

語でも用いられる「～ハセマイカ/シナイカ」の例はまだ少数にとどまる点の等で過渡期様相を呈しているようであり、後者の評価的複合形式についても、近世後期には見られなくなった前項部が「～バ」である「～バワルイ」のような形式が一定の勢力を保っている点等に、やはり過渡期的様相が認められるようであった(雑誌論文)。

近世後期とりわけ化政期～幕末期の滑稽本・人情本においては、可能・可能性系の複合形式では、「～カネナイ」が危惧表現形式としての地位を固めつつあること、「～ウカモシレナイ」や「～カモシレナイ」が、前代以来の「～ウモシレヌ/シラナイ」や「～モシレナイ」にとって代る兆候を見せていること等において、前代と異なる様相が見受けられた。また疑問推量系の形式では、「～ハセマイカ/シマイカ」や「～ハシナイカ」等、「～ハ」を伴う否定疑問推量形式の使用が目立つようになってきている点、評価的複合形式では、前項部が「～バ」である「～バワルイ」のような形式が既に見られなくなっている一方、後項部が「～イカナイ/イケナイ」である「～トイケナイ」のような形式が多用されるようになり危惧専用化も進んでいる等、より現代語に近い様相を呈してきつつある一方、後項部が「～ワルイ」である「～トワルイ」が依然根強く用いられているといった現代語とは異なる様相も見受けられる等の状況を明かにすることができた(雑誌論文)。また上記の結果等とあわせ、「危惧」というカテゴリーは、古代以来一語の助動詞・助詞等によって担われるのではなく、複合助詞・複合助動詞・評価的複合形式といった複合辞的な形式によって多くが担われてきたことが確認された。

(4) 上記(1)～(3)の成果を踏まえて、以下のような展望を得た。

本研究着手当初においては、危惧表現形式の歴史について、「モゾ」「モコソ」が用いられなくなった後、「～カネナイ」が危惧の意に転じて用いられるようになったことでそれを補う形になった等、比較的単純な図式でその消長をたどり得る可能性もある程度念頭にあった。だが本研究を通じて「モゾ」「モコソ」が「真正モダリティ」に属するものと見られるのに対し、「～カネナイ」は「疑似モダリティ」に属すると見られるといった質的相違の存在が知られ、そのような点にも留意する必要があるとの認識を得た。また「不定的危惧」や「既実現事態危惧」をも含めた危惧表現史を描こうとするのであれば、古代語の段階から「モゾ」「モコソ」以外の形式(例えば(2)の で述べた疑問推量形式等)にも着目していく必要があるといった認識も得ることができた。このように当初の想定以上に多様な観点からより掘り下げた考察を行な

う必要があるとの展望のもと、かかる立脚点からの考察を更に進めていく必要性が確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

近藤 明、「危惧表現形式の一環としての複合助動詞「ヌベシ」「ツベシ」の位置」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』8、2016、査読無、pp.11-20

<http://hdl.handle.net/2297/44774>

近藤 明、「「モゾ」「モコソ」の表す「危惧」の性質をめぐって(下)」『北陸古典研究』30、2015、査読無、pp.38-46

近藤 明、「化政期～幕末期江戸語における危惧表現形式」『国語語彙史の研究』34、2015、査読無、pp.167-184 和泉書院

近藤 明、「近世前期における危惧表現形式 近松世話浄瑠璃を中心に」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』7、2015、査読無、pp.1-10

<http://hdl.handle.net/2297/41679>

近藤 明、「「モゾ」「モコソ」の表す「危惧」の性質をめぐって(上)」『北陸古典研究』30、2014、査読無、pp.24-29

近藤 明、「万葉集・三代集における危惧表現形式をめぐって 「モゾ」「モコソ」を基点として」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』7、2014、査読無、pp.13-20

<http://hdl.handle.net/2297/39157>

〔学会発表〕(計 1 件)

近藤 明、「危惧表現史記述への課題」、第65回中部日本・日本語学研究会、2013年7月20日、刈谷市産業振興センター(愛知県)

〔その他〕

ホームページ等

雑誌論文 近藤 明 は、金沢大学学術情報リポジトリ「KURA」に登録・公開。

(各論文の URL は 5 の〔雑誌論文〕欄に記載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 明 (KONDOH Akira)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：50178406